

「双子織の町」に 蕨を

26. 8-3 49日

綿織物業の衰退とともに消えてしまった蕨市の名産品「双子織」が、再び注目を集めている。故郷の町おこしに貢献しようと、和泉備神社（蕨市中央4）の神職、堀江清隆さん（53）が10年前に復活させると、バッグや洋服などの商品が「素朴で肌触りがいい」と評判を呼び、じわじわとファンが増えてきた。蕨商工会議所がマスコットキャラクターのデザイン募集を行うなど、応援の輪が広がっている。

【鶴沢哲雄】

「素朴で肌触りがいい」

蕨の綿織物業の基礎 商店が20店近く軒を運を作ったのは、同市塚越出身で「機神様」として知られる二代目高橋新五郎。明治初期に機織り機の改良に成功した後、2本の糸をからませて丈夫な布を作る「木綿双子織」を発明し、市内の綿織物業を飛躍的に発展させた。

1960年代の半ばまで、市内には40以上の機織り工場があり、布を扱う問屋や糸を売る商店が20店近く軒を運を作ったのは、同市塚越出身で「機神様」として知られる二代目高橋新五郎。明治初期に機織り機の改良に成功した後、2本の糸をからませて丈夫な布を作る「木綿双子織」を発明し、市内の綿織物業を飛躍的に発展させた。



双子織を復活した堀江さん（右）と支援した徳丸さん

10年前に復活 バッグや洋服 評判高まる



双子織を使ったバッグなどを紹介する川村さん（右）と吉村さん

した。

ただ、伝統復活には大きな障害があった。市内では最後の機織り工場が90年に廃業。関東周辺を約1年かけて探し回り、ようやく群馬県館林市内に製造を委託できる工場を見つけた。

生地の確保にめどをつけた堀江さんらは、蕨市内で注文服の店を開いていた川村みつ子さん（70）に白羽の矢を立てた。川村さんの店でフレザーや洋服、和服の帯、コート、ハンチング帽などを次々に商品化。娘の吉村宏美さん（42）はバッグやブックカバーなど小物類のデザインを担当する。普及を優先し、価格

品を決める。

同商議所が募集していたキャラクターデザインは、7〜10日の「機まつり」で人気投票を行うなどし、最優秀作